

北海道太平洋沿岸および根室海峡におけるウバガイ
Spisula sachalinensis の外套腔に生息するヒモビル
Malacobdella japonica について

堀井貴司

ヒモビルは、北海道太平洋沿岸および根室海峡のウバガイ漁場で漁獲されたウバガイのほとんどすべてに共生していた可能性が高い。共生率は宿主の成長とともに上昇し、殻長 60 mm で 90% を超えた。ヒモビルの体重の最大値は 350.9 mg であった。共生が認められた 99% は、宿主 1 個体に対してヒモビル 1 個体の共生であった。宿主に 2 個体以上共生していたヒモビルのほとんどは幼体であり、生存競争の結果、概ね 30 mg までに単独生活に入ると考えられた。

A641 北水試研報 108, 1-11 (2025)

飼育試験によるエゾアワビ餌料環境評価指標の検討

千川 裕, 高谷義幸

アワビ漁場の餌料環境評価に適した指標を明らかにするために、生のマコンブを餌として給餌量を変えて個別に飼育したエゾアワビについて、各重量（全重量、軟体部重量、筋肉重量、筋肉乾燥重量）と殻長から計算した各肥満度、筋肉含水率および筋肉グリコーゲン含有率と実際の摂餌量の関係を調べた。その結果、各肥満度は餌不足の状態では摂餌した餌の量を正確に反映したが、餌の量が増加した場合には、摂餌量の差を検出できなかった。一方、含水率とグリコーゲン含有率は、飢餓状態から飽食状態まで様々な餌料環境において、実際に摂餌した餌の量をより正確に反映することが明らかになった。

A642 北水試研報 108, 13-24 (2025)

低水温下におけるワカサギ *Hypomesus nipponensis* 仔魚の
飼育方法およびシオミズツボウムシに対する摂餌サイズ

山崎哲也, 佐藤敦一, 高畠信一

低水温で培養した L 型ワムシを用い、低水温・低塩分環境下におけるワムシの活性およびワカサギ仔魚の摂餌サイズを調べた。また、約 10℃ の冷水環境下におけるワカサギの飼育手法を掛け流しと止水で比較した。仔魚は、ふ化直後から平均背甲長 194 μm (107 ~ 265 μm) および平均背甲幅 128 μm (93 ~ 156 μm) のワムシを摂餌していた。ワムシ培養試験では塩分 1 において長期間の活性を確認した。飼育試験では掛け流し区 (20.6%) よりも止水区 (46.0%) の生残率が高かった。止水飼育はワムシの活力を維持できるため、ワカサギ仔魚の生存に有効であることが確認された。

A643 北水試研報 108, 25-32 (2025)

北海道西部日本海のえびかご漁業における狙い操業を考慮したホッコクアカエビの CPUE (短報)

守田航大, 坂口健司

北海道西部日本海でえびかご漁業によって漁獲されるホッコクアカエビの漁獲量は減少傾向にある。種別漁獲量では、2000-2014 年はホッコクアカエビの割合が 70% 以上と高かったが、2015-2022 年はトヤマエビおよびその他の割合が 30-70% と高くなった。この要因として狙い対象種がホッコクアカエビからトヤマエビやその他に変化したことを示した。狙いの影響を考慮した CPUE の一つである directed CPUE を算出し、狙いの変化によって生じるバイアスを除いたホッコクアカエビの資源量指標値を算出した。

A644 北水試研報 108, 33-40 (2025)

磯焼けがエゾアワビの成長に影響を及ぼす季節の検討
(短報)

干川 裕, 高谷義幸

磯焼けが顕著な日本海の古平と、秋までマコンブが生
育する噴火湾の豊浦から春、夏および秋に採集したエゾ
アワビについて、全重量肥満度 (CI), 軟体部重量肥満
度 (CIS), 筋肉重量肥満度 (CIM), 筋肉乾燥重量肥満
度 (CIDM), 筋肉含水率および筋肉グリコーゲン含有
率を調べ、季節ならびに漁場間の違いを検討した。古平
の夏の各肥満度と、秋の CIS および CIDM は同時期の
豊浦に比べ低かった。含水率は、古平の秋だけが他の季
節および豊浦に比べて高かった。グリコーゲン含有率は、
豊浦の秋だけが顕著に高かった。これらの結果は、産卵
後の回復期にあたる秋の餌の多寡が漁場間の成長差に強
く関係している可能性を示唆している。

A645 北水試研報 108, 41-44 (2025)

油脂添加飼料の給餌が海水移行後のサケ稚魚の成長率に
与える効果 (短報)

虎尾 充

飼育実験によって、油脂添加飼料の給餌が海水移行後
のサケ稚魚の成長率向上に寄与するかどうかを検証し
た。淡水飼育時に配合飼料に魚油ないしサーモンリキッ
ドを添加して給餌することで、魚体に脂質が蓄積される
ことが確認された。これらのサケ稚魚の成長率は海水移
行後の極めて悪い餌条件下で補償される可能性が認めら
れた。しかし、成長率の差は 0.1 mm/day 程度と小さく、
この成長差が生残に影響するかは不明であり、今後の調
査が必要である。

A646 北水試研報 108, 45-49 (2025)